イリ事件再考
――カザフスタン国立文書館所蔵史料との対照から――

野田　仁

本報告は、1871～81年におけるロシアによるイリ地方（清朝領新疆北部、現在の伊犂哈薩克自治州）占領について、新たな史料を検討しながら、露清双方にとっての意味と現地社会に与えた影響とを再考察することを目的としている。

前半では、これまでの研究に拠りつつ、ロシアの新疆への出兵が、ロシア帝国の中央アジア征服の過程において国内の意思統一（中央政府とトルキスタン・セミレチエとの間で）の結果行われていたことを確認した。また、報告者が別に論じたように、1860年代の新疆におけるムスリム反乱がイリ地方にも大きな混乱をもたらし、それがロシアにとって貿易と辺防の大きな障害となっていたことは言うまでもない[(1)]。

占領後のロシアによるイリ地方統治を考えるにあたって、そもそも清代イリ地方においては多様なエスニシティーが形成されていたことに注目すべきである。それは、駐防満蒙八旗兵および緑旗兵、「旗屯」として入植したチャハル、シベ、ソロン（ダウールを含む）、オイラト、さらに、ヴォルガ地方から移動してきたトルグート遊牧民、「回屯」として農業に従事するタランチ、遊牧を行うカザフなどで構成されていた。このような複雑な社会構造に対して、ロシア当局は人口調査を行うことにより徴税のための情報を把握し、清朝統治期に比べれば少ない税負担を課し、この地域の安定化に努めていた。人口、農業生産、貿易額などについての情報はイリ地方官房主任を務めていたパントゥソフが編纂した統計資料を利用することができる[(2)]。結果として、ロシア帝国が重視していたのは、イリ経由の対清朝貿易の復活と、イリ地方の、とりわけ農業生産を基本とする「開発」であったことが明らかになった。ここまでの内容については、拙稿（野田仁2009「イリ事件再考：ロシア統治下のイリ

(1) Noda Jin 2006, “The Qazaqs in the Muslim Rebellion in Xinjiang of 1864-65,” *Central Eurasian Studies Review*, Cambridge (MA), Vol.5, No.1, pp.28–31.

(2) Pantusov1876: Н. Н. Пантусов, Статистические сведения по Кульджинскому району. // *Материалы для статистики Туркестанского края*, вып. 4, с. 139–195.; Pantusov1881: *Сведения о Кульджинском районе за 1871-1877 годы*, собранные Н. Н. Пантусовым, Казань: в Университетской Типографии.

地方（1871-1881 年）」『イリ河流域歴史地理論集――ユーラシア深奥部からの眺め――』（窪田順平・承志・井上充幸編）松香堂、141-188 頁）を併せてご参照いただきたい。

後半では、改めて具体的な史料を確認するとどのようなことが考えられるのかを考察した。その際にはカザフスタン国立中央文書館（TsGA RK）が所蔵している「イリ地方にかかわる官房 Канцелярия по кульджинским делам」文書を参照することが不可欠となることはたしかである。この文書群は当該文書館のフォンド 21 番を構成しているが、その中には、総計 700 におよぶファイル（delo）が含まれている。イリ地方の多民族社会を反映し、ロシア語のみならず、テュルク文、満文、トド文、漢文の文書が混在し、当時の現地社会についての貴重な記録を含んでいると言えるだろう。ロシア側がイリ地方統治のために採った具体的な政策は以下の通りである。

・ロシア占領以前にイリを支配していたタランチのスルタンの処遇問題の解決
　　ロシア軍による降伏要求の布告と各民族集団の投降
・人口・家畜の調査
　　「地区 uchastok」と呼ばれる行政区分の設定
・土地の調査
　　灌漑水路図の作成など
・都市のインフラの整備
　　ロシア語学校、病院、裁判所などを建設
・民族別の紛争解決システムの導入

上の政策からは、イリ地方の生産状況の把握と収入・社会の安定化を図っていたことが理解される。

また外交にかかわる問題では、国境・境界についての情報を収集し、対清朝外交においても、イリにおけるロシア当局は清側の動きを把握し、交渉を行っていたことが明らかになる。そこからは、とくに貿易に対するロシア側の意欲を見て取ることができよう。

これらの状況からイリ地方の特徴を考えてみると、人と物資の出入り口となっていることがこの地方の重要性を高め、逆に、その結果として、多様なエスニシティーで構成されるが故に、統制することが難しく帝国の辺境統治の綻びともなっていたと考えられるだろう。今後の課題としては、後半で示した新しい史料から明らかになるより具体的な政策を加味しながら、ロシア統治がイリ地方にもたらした影響についてさらに考察を深めることが必要になると思われる。

（早稲田大学イスラーム地域研究機構）